



無断立入禁止
構内禁煙
北陸力ス株式会社

北陸力ス株式会社
関屋工場

証明

作・JUYNP NOZAKI

証明

おれは、父親を殺した。

あいつは、おれの母をだまし、妊娠までさせ、そしてすべてを奪い、母の人生をぼろぼろにして消えた。母は、結婚詐欺であるあいつを恨んでも、その血の流れるおれには優しくった。しかし、苦勞して苦勞して、死んだ。その後、母の妹に育てられたおれは、あいつに復讐することだけ考えて生きてきた。ただ、育ての母からは、「年齢が分からない不気味な男」としか、あいつに関する情報を得ることができずにいた。

成人したおれに、ある日、老人が近づいてきた。母を捨てた遺伝子上の父親は、その後もいくつかの犯罪を重ね、多くの人間を不幸にしなが、生き延びている。その老人は、あいつの最初の被害者である、あいつの父親だと名乗った。あいつのことを話すときは少しおびえているようにも見えた。「あいつが、おまえの肉親であることを今はDNA鑑定という方法で、簡単に証明できる。なんなら費用はわしがもとう。」

老人の目的はおれと同じだった。ただ、あいつは老人を警戒し殺害のチャンスを与えない。そこで、おれに相談してきたという。

DNA鑑定の結果が出るまで、おれはあいつの身辺調査をした。老人の言うようにとてつもなく悪いやつであることはよくわかった。

何度も刑務所に世話になっていることもわかった。

数日後、DNA鑑定の結果、あいつがおれの「肉親」であることが証明された。老人との間で、殺害の準備は老人が行い、実行はおれがするということではなしたが、老人と決行の日を決めた。

決行日の夜遅く、約束通りに結果の報告をしに老人の家を訪ねた。

「お、ぼうず、うまくいったか」
「ああ、うまくいったよ」
「じゃあ、どこか遠いところへ逃げたほうがいいな」
「おれは逃げない。逃げるとしたら、あんたのほうさ」
「えっ、あいつを殺したんじゃないのか」
「……」
「うまくいったと言ったのは、おまえの父親を殺せたということじゃないのか」
「だって、あいつはおれの父親じゃない」
「何言ってるんだ。ちゃんとDNA鑑定で、はっきりしたじゃないか」
「鑑定ではっきりしたのは、あいつがおれの肉親だということだけだ。あんたには黙っていたが、鑑定結果を待つ間にわかったことがある。あいつは、おれの母親が結婚詐欺にあっている期間には、刑務所の檻の中にいたんだ。不可能の証明なんだ。そうすると、肉親の肉親が怪しいということになる。うまくいったと言ったのは、あいつにあんたの居所を教えるかわりに、あいつが必ず、あんたを殺すという約束が成立したってことさ。あいつは、もう近くまで来ているはずさ」

老人は一瞬驚きの様子をみせたが、次の瞬間、観念したのか、育ての母親が何度も語って聞かせてくれた言葉どおりの「年齢不詳の男」にもどっていた。

証明とは、万人を納得させる方法であるが、今回の証明は、たった一人が理解できればそれでよかった。それから数日後、老人の死体発見の小さな記事が新聞の片隅に載った。

おれは、父親を殺した。間接的に、ではあるにせよ。